

29pmG-058S

学生主体で構築した新たな服薬指導事前実習の評価

○青野 いづみ¹, 桑原 亜記¹, 今井 奈津美¹, 劔田 侑希¹, 手塚 淑人¹,
門田 佳子¹, 小林 典子¹, 鈴木 小夜¹, 大谷 壽一¹, 佐伯 晴子², 木津 純子¹
(¹慶應大薬, ²東京SP研究会)

【背景・目的】実務実習における患者とのコミュニケーションに対し不安を感じる学生は多い。本学部の5、6年生で不安および問題点について討議し、その声を基に新たな服薬指導実習を構築し、4年次の事前学習に追加した。今回は、実習の終了時に学生にアンケート調査を実施し、本実習を評価することを目的とした。

【方法】実習で用いた症例は学生が実務実習の経験を基に作成し、「手指の動かしにくさを訴える関節リウマチの高齢者」「アドヒアランスの低い脂質異常症の患者」「ステロイドに不安を持つアトピー性皮膚炎の小児の母親」とした。実習は本学部4年生147名(4分割)を対象とし、実習内容は①各症例1名の代表者が模擬患者(SP)に対する服薬指導、その他の学生は患者の表情が見えるよう同時にスクリーンに上映したのを見学、②患者の問題点についてスモールグループディスカッション(SGD)、SOAP形式の薬歴を作成、③学生全員がSPもしくは上級生(SA)に対する時間制限のない服薬指導とSP、SAのフィードバック、④薬歴と服薬指導の留意点についてのSGDおよびプレゼンテーション、とした。アンケートは実習の評価に関する4段階評価もしくは複数回答からの選択および自由記述とした。

【結果・考察】3症例の難易度のバラつきは少なかった。「SPに対する服薬指導やSPからのコメントは実務実習に役立つと思うか」は100%が、SAの場合は99%が“大変”または“やや”そう思うと回答した。「大切だと学んだこと」は“相手の気持ちをくみ取ること”62%、“薬に関する知識”60%、“共感・傾聴の姿勢”58%などであった。「本実習は実務実習に役立つと思うか」は“大変”または“やや”そう思う学生が99%であり、学生が構築した本実習は効果的であったと考えられる。今後、症例数を増やすなどさらに効果的な服薬指導実習とする予定である。